



# 瀬田の丘

創刊 1973年

編集・発行／カトリック瀬田教会信徒会広報部  
東京都世田谷区瀬田 4-16-1



今日のみことば

四旬節第4主日 A年 (2023年3月19日)

瀬田教会主任司祭 小西広志神父

第一朗読：サムエル記上 16章 1b、6—7、10—13a 節

第二朗読：エフェソの信徒への手紙 5章 8—14 節

福音朗読：ヨハネによる福音書 9章 1—41 節

## 主よ、信じます

### 病気と罪

今日の福音は「生まれつきの盲人<sup>もうじん</sup>をいやす」物語です。二つの朗読箇所が指定されていて、物語全体が読まれる長いもの（ヨハ9章1—41節）と、物語のエッセンスを取りだした短いもの（9章1、6—9、13—17、34—38節）があります。『聖書と典礼』には短い朗読箇所だけが記載<sup>さい</sup>されています。ミサの中で朗読されることはないでしょうが、冒頭<sup>ぼうとう</sup>の数節<sup>しる</sup>を記しておきます。

9・1さて、イエスは通りすがりに、生まれつき目の見えない人を見かけられた。9・2弟子たちがイエスに尋<sup>たず</sup>ねた。「ラビ、この人が生まれつき目が見えないのは、だれが罪<sup>つみ</sup>を犯<sup>おか</sup>したからですか。本人ですか。それとも、両親ですか。」9・3イエスはお答えになった。「本人が罪を犯したからでも、両親が罪を犯したからでもない。神の業<sup>わざ</sup>がこの人に現<sup>あらわ</sup>れるためである。9・4わたしたちは、わたしをお遣<sup>つか</sup>わしになった方<sup>かた</sup>の業<sup>わざ</sup>を、まだ日のあるうち<sup>おこな</sup>に行<sup>い</sup>わねばならない。だれも働<sup>はたら</sup>くことのできない夜が来る。9・5わたしは、世にいる間、世の光である。」

当時のユダヤ教では病気、あるいは障碍<sup>しょうがい</sup>は罪の結果だと考えられていたようです。生まれつき目の見えない人を見かけて、弟子たちは興味本位<sup>きょうみほんい</sup>に「だれが罪を犯したからですか。本人ですか。両親が罪を犯したからですか」（2節）と尋ねます。イエスさまの答えは「神の業がこの人のうちに現れるためである」（3節 フランシスコ会訳）と答えます。この答えは神の子であるイエスさまだからこそいえる答えです。病気や障碍<sup>せお</sup>を背負った人に現れる神の業とは一体なんでしょうか？ そんなことを考えさせる今日の福音の箇所です。

## 【あじわいのポイント】

第一朗読に「人間は外観<sup>がいかん</sup>を見るが、主<sup>しゅ</sup>は心を見る」(7節 フランシスコ会訳)とあります。人間が見ているものと、主なる神が見ておられるものとが異なり、人間の目には小さく映るダビデが、神によって選ば<sup>えら</sup>れる点を味わいたいです。

第二朗読では14節の「眠りにについている者、起きよ……」に注目してください。ここでの引用箇所は、初代教会で洗礼を授けるときに用いた賛歌ではないかといわれています。「起きる」はギリシア語でエゲイロー、「立ち上がる」はアニステーミですが、どちらの動詞も復活を表すものです。死者の復活を歌う賛歌であると同時に、古いいのちに死んで、洗礼によって新しいいのちに生きる受洗者への呼びかけの言葉です。

「眠りにについている者」の「眠る」はギリシア語でカセウドーですが、文字どおり「眠る」ことを表します。そこから、意味が広がっていき、「死ぬ」も意味しました。

福音朗読では38節を見てください。「彼が、「主よ、信じます」と言って、ひざまずいた」とあります。この節をフランシスコ会訳を見てみると、「彼は、『主よ、信じます』と言って、イエスを礼拝した」となっています。「主よ、信じます」は初代教会の洗礼式での信仰宣言文を反映しているといわれています。

## 説教：「主よ、信じます」

第二朗読の最後は初代教会の洗礼式での賛歌でした。また、「主よ、信じます」も洗礼式での信仰宣言でした。このように、新約聖書の中には初代教会の信仰の営みから生じた言葉がたくさん登場します。

「主よ、信じます」という宣言はかなり重みがあるものです。それは、イエスさまからの呼びかけ、語りかけをここに感じたからこそ出てくる言葉です。「信じる」とはイエスさまを通じて、神さまとの親しい交わりを生きていくということです。

「救いの歴史」という表現を覚えてください。神さまは人類を御自分の方へと引き寄せようとして歴史を動かします。神さまは、歴史の神でもあるのです。同じように人間一人ひとりの人生の歩みを動かすのも神さまです。生まれたときから今日に至るまで、神さまは一人ひとりに関わってくださるのです。そして、これからも関わってくださるのです。人は「救いの歴史を」生きるのです。

神さまから出て、この世で神さまを求め歩き、そして、神さまへのもとへと帰って行くのが人の一生です。この「神から神へ」の旅路を一緒に歩んでくださるのが「真の旅人」であるイエスさまなのです。